

# 大学生の養護性および共同的養護規範意識とボランティア活動への関心・着手意欲の関係 ―子どもと関わるボランティア活動について―

野 上 真

## Abstract:

This study explored the relationship between nurturance (empathy, skills, preparedness, acceptability), public nurturance norm (normative belief that children should be nurtured by whole regional community) and interest, motivation to volunteer (especially volunteer which involves activity with children) of university students. The survey was administered to 137 students. The results are as follows. Firstly, empathy had positive partial correlation with interest and motivation to volunteer when public nurturance norm was high. Secondly, skills had positive partial correlation with interest to volunteer when public nurturance norm was low. Thirdly, empathy had more positive partial correlation with interest and motivation to volunteer in case of person with experience of volunteer. Fourthly, preparedness and public nurturance norm had positive partial correlation with interest and motivation to volunteer in case of person non-experienced about volunteer.

## I. 問題

青年期におけるボランティア活動の代表的なものに、子どもと関わるボランティア活動が挙げられる<sup>1)</sup>。子どもと関わるボランティア活動は、子育てや子どもの成長を支援する活動への参画という社会的意義はもちろん、青年期における教育的意義の観点からもその重要性が認められる。例えば川瀬（2010）は、若年者が子育てについて日常的に学習する場が失われつつある中で、ボランティア活動等で子育てを経験することの重要性が認められることを指摘している。また、多様な他者と交流し、信頼関係を築く上での積極性やスキルを培う上でも、子どもやその保護者と関わるボランティア活動の教育的意義は高いものと考えられる。

本研究では、青年の子どもと関わるボランティア活動への関心・着手意欲の規定要因として、養護性（nurturance）に注目し、その影響を明らかにすることを

主な目的とする。

養護性は、「相手の正常で健全な発達の促進のために用いられる共感性と技能」(Fogel & Melson, 1989) と定義される。ここでいう「相手」は、世話・援助を必要としている発達しようとする存在一般のことであり(小嶋, 1991), 人間のみならず動植物等まで含まれるが(Fogel, Melson & Mistry, 1986), 本研究では、子どもと関わるボランティア活動への関心・着手意欲の規定要因として養護性を取り上げることから、幼い子どもに対する養護性に焦点を絞る。

従来の研究では、弟妹や小さな子どもと関わる経験を豊富に有する青年や、サークル、ボランティア、授業での幼児との関わりを経験を有する青年は、そうでない青年より養護性が高い傾向にあることが明らかにされており、それらの知見は、子どもと関わった過去の経験が現在の養護性を高めるという因果関係を示唆している(例えば、安積, 2008; 岩治, 2009; 榎澤・福本・岩立, 2009; 礪波, 2011; 礪波, 2012)。

一方、高い養護性が、更に子どもと関わる経験を促すという影響過程が存在していることも指摘されているものの(礪波, 2011; 金丸, 2019), この点について実証的に検討した研究はほとんど見当たらない。特に、養護性の高さが子どもと関わるボランティア活動への関心・着手意欲にもたらす影響についてはいまだ検討されていない。

先に述べたように、養護性は他者の育ちを助けるための共感性や技能であることから、子どもと関わるボランティア活動への参加促進要因として、近接的なものと考えられる。子どもと関わるボランティア活動の場合、子どもの成長を支援するという目的が明確であるためである。

本研究では、さらに、青年の養護性が子どもに関わるボランティア活動への関心・着手意欲に及ぼす影響を規定する調整変数として、養護に関わる社会的規範意識および、子どもと関わるボランティア活動への参加経験に注目する。

## 1. 養護に関わる社会的規範意識が養護性と子どもに関わるボランティア活動への関心・着手意欲の関係に及ぼす影響

子どもを養護することについての社会的規範意識のうち、本研究で注目するのは、「地域社会全体として子どもを守り育てるべきである」という規範意識である。これを、以降では共同的養護規範意識と呼ぶことにする。

子どもの養護についての責任の所在は社会によって決定される(Fogel, Melson & Mistry, 1986)。日本の場合、地域の人間関係が希薄化する中、子どもと地

域社会のつながりが弱まっていること（太田，2014），また，社会で子育てをするという意識が薄れつつあること（富山，2013）が指摘されている。もしそうであるとすれば，他者の子どもに対し，養護的な関わりを持つことへの遠慮すら意識されやすい環境になりつつあるのではなからうか。しかしながら，共同的養護規範意識が強い人は弱い人に比べ，このような遠慮を比較的感じにくく，むしろ他者の子どもにも養護的に関わることを望ましいと考える傾向にあるため，養護性の高さが，子どもと関わるボランティア活動に対する関心・着手意欲に結びつきやすくなることが予想される。よって，以下の仮説を提起する。

仮説1： 養護性と子どもと関わるボランティア活動への関心・着手意欲の正の相関は，共同的養護規範意識が低い人より高い人において顕著に見られるであろう。

## 2. ボランティア経験が養護性と子どもと関わるボランティア活動への関心・着手意欲の関係に及ぼす影響

伊多波・首藤（2017）は，障害児キャンプでのボランティアに参加した大学生への調査により，過去に障害児キャンプボランティアへの参加経験が多い学生は，少ない学生よりも，活動を通じての自己成長の期待や，活動についての自己効力感が高い傾向にあることを明らかにしている。こうした結果は，彼らが指摘するごとく，過去のボランティア活動での成長経験や，活動経験を通して育まれた自信によるものであろう。ボランティアに関わる自信は，ボランティアへの着手意欲の促進要因であること（Okun & Sloane, 2002; Hyde & Knowles, 2013），逆に，ボランティア活動に要する技術や知識について自信が持てないことは，ボランティア参加を抑制する要因となること（内外学生センター，1999）が明らかにされている。

特に子どもと関わるボランティア活動においては，養護性の要素としての子どもと関わる一般的スキルに加え，個々のボランティア活動で要求される固有のスキル（障害児に関わるボランティアならば介助に関わるスキル，学習指導を内容とするボランティアならばティーチングに関わるスキル等）が要求されるケースが多いことから，それら固有スキルの発揮に関し，経験に裏打ちされた自信を持ってない場合，養護性の高い人でも，子どもと関わるボランティア活動に参加する上で躊躇しやすくなることが予想される。よって，以下の仮説を提起する。

仮説2： 養護性と子どもに関わるボランティア活動への関心・着手意欲の正の相関は、子どもと関わるボランティア活動の経験がない人よりある人において顕著に見られるであろう。

### 3. ボランティア経験が共同的養護規範意識と子どもに関わるボランティア活動への関心・着手意欲の関係に及ぼす影響

共同的養護規範意識が子どもに関わるボランティア活動への関心・意欲に結びつく度合に関しても、子どもと関わるボランティア活動の経験がない人よりある人の方が顕著に見られることが予想される。共同的養護規範意識が高い人の場合、地域社会の一員として、地域の子どもの育成に関わるべきという意識を持っているものと考えられるが、実際に子どもと関わる活動に参加する上では、経験に裏打ちされた自信が促進要因となると考えられるためである。よって、以下の仮説を提起する。

仮説3： 共同的養護規範意識と子どもに関わるボランティア活動への関心・着手意欲の正の相関は、子どもと関わるボランティア活動の経験がない人よりある人において顕著に見られるであろう。

## II. 方法

### 1. 手続き

2016年7月、鹿児島県内の私立大学に在籍する、大学生137人を対象に質問紙調査を実施した。心理学の講義の時間に質問紙を配布し、その場で記入してもらい回収した。調査対象者の性別・学年別内訳を表1に示す。

表1. 調査対象者の性別・学年別内訳

	1年生	2年生	3年生	4年生
男性	22人 (16.8%)	8人 ( 6.1%)	22人 (16.8%)	7人 (5.3%)
女性	51人 (38.9%)	14人 (10.7%)	4人 ( 3.1%)	3人 (2.3%)

※表中数値は人数、カッコ内は全人数に占める割合である。ただし、性別に関して欠損値を有するデータ（6名分）は集計から除かれている。

また、調査対象者を専攻別で見ると、101人（73.7%）が心理学専攻であり、その他の36人（26.3%）は人文科学、法学の専攻であった。

## 2. 質問項目

### (1) ボランティア活動への関心・着手意欲

子どもと関わるボランティア（託児ボランティアや、子どもへの学習指導、スポーツ指導、レクリエーション指導等の教育ボランティア）への関心について、「そうしたボランティアに関する情報に興味はある」「そうしたボランティアに参加できる機会に関心はある」の2項目、また、着手意欲については、「機会があればそうしたボランティアに参加してみたいと思う」「日程的に都合がつかずなら、そうしたボランティアに参加してみたいと思う」の2項目について、「全くそう思わない」～「非常にそう思う」までの5段階評価で回答してもらった。 $\alpha$ 係数は、ボランティア活動への関心について .94、ボランティア活動への着手意欲について .97であった。

### (2) 養護性

榎澤・福本・岩立（2009）の養護性尺度について回答を求めた。この尺度は小さい子どもに対する養護性を測定するものであることから、子どもを対象としたボランティア活動への関心・着手意欲の規定要因としての養護性を測定する上で適切であるものと考えられる。25項目について、「全くあてはまらない」～「とてもよくあてはまる」までの6段階評価で回答してもらった。

因子分析（主因子法・プロマックス回転）により、4因子を抽出し（巻末資料）、第一因子から第三因子までの命名は榎澤・福本・岩立（2009）に倣い、「幼い子どもに対する技能の認知（以下「技能」と呼ぶ）」「幼い子どもに対する共感性（以下「共感性」と呼ぶ）」「親への準備性（以下「親準備性」と呼ぶ）」と命名された。第四因子については、子どもへの拒否的態度を内容とする項目に負の負荷量を示したため、「子どもの受容性（以下「受容性」と呼ぶ）」と命名された<sup>2)</sup>。そして、単一の因子に絶対値 .50以上の負荷量を持つ項目で下位尺度を構成した。なお、「共感性」「技能」「親準備性」の得点については単純加算によるが、「受容性」の得点については、下位尺度の各項目の得点を反転させて合計点を算出した。

$\alpha$ 係数は、共感性について .91、技能について .95、親準備性について .92、受容性について .82であった。

### (3) 共同的養護規範意識

子どもを地域社会全体で育てるべきとする規範意識を測定する項目を独自に作

成した。「子どもは地域社会全体で育てるものだと思う」「子どもの成長を見守る地域社会であるべきだと思う」「地域社会全体で子育てをしやすい環境づくりに関心を持つべきだ」の3項目について、「全くあてはまらない」～「とてもよくあてはまる」までの6段階評価で回答してもらった。 $\alpha$ 係数は.85であった。

#### (4) 子どもを対象としたボランティア活動経験の有無

子どもと関わるボランティアへの参加経験の有無を問い、参加経験がある、と回答した者については、具体的にどのような活動に参加したか記述してもらった。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 調査対象者のボランティア活動への参加状況

調査対象者137人のうち26人(19.0%, 男性5人, 女性21人)が、子どもと関わるボランティア活動への参加経験を持っていた。なお、ボランティア活動の内容に関しては、託児、読み聞かせ、小学校での授業サポート、障害児との交流等が含まれていた。

#### 2. 本研究で取り上げる独立変数間および調整変数間の関係について

本研究で取り上げた独立変数(養護性の各要素および共同的養護規範意識)の間の相関および、各変数の平均値(1項目あたり)について表2に示す。

まず、養護性の各要素は互いに有意な中程度以上の正の相関を持っていた。また、養護性の各要素と共同的養護規範意識の間には、部分的に有意な正の相関が見られた。よって、これら独立変数の影響を検討する上では、その影響関係を互いに統制する必要がある。

表2. 本研究で取り上げた独立変数間の相関と平均値

変数名	M(SD)	1	2	3	4	5
1. 共感性	4.13(0.99)	—				
2. 技能	3.12(1.28)	.64**	—			
3. 親準備性	4.18(1.26)	.59**	.59**	—		
4. 受容性	4.53(0.98)	.60**	.58**	.53**	—	
5. 共同的養護規範意識	4.58(0.94)	.31**	.05	.25**	.13	—

※ \*\* $p < .01$

また、本研究で取り上げる二つの調整変数（子どもと関わるボランティア活動への参加経験と共同的養護規範意識）の関係を検討した。その結果、子どもと関わるボランティア活動への参加経験がある者（26人）とない者（111人）の間で、共同的養護規範意識に有意差は見られなかった（前者：M=14.54, SD=2.35, 後者：M=13.57, SD=2.89,  $t=1.59$ , n.s.）。また、共同的養護規範意識の平均値を基準とした高群（77人）と低群（60人）の別と、子どもと関わるボランティア活動への参加経験の有無についてのクロス集計を行ったものが表3である。両要因について、独立性の検定の結果は有意でなかった（カイ二乗値=1.10. n.s.）。このことにより、本研究で取り上げる二つの調整変数が相互に独立性を持つことが確認された。

表3. 共同的養護規範意識の平均値を基準とした高群と低群の別と、子どもと関わるボランティア活動への参加経験の有無（クロス集計）

	共同的養護規範意識低群	共同的養護規範意識高群
ボランティア経験なし	51人 (37.2%)	60人 (43.8%)
ボランティア経験あり	9人 (6.6%)	17人 (12.4%)

※表中数値は人数、カッコ内は全人数に占める割合である。

### 3. 共同的養護規範意識が養護性と子どもに関わるボランティア活動への関心・着手意欲の関係に及ぼす影響

表4は、仮説1（養護性と子どもに関わるボランティア活動への関心・着手意欲の正の相関は、共同的養護規範意識が低い人より高い人において顕著に見られるであろう。）を検討するため、共同的養護規範意識の平均値を基準とした高群（77人）と低群（60人）、それぞれについて、養護性の各要素と子どもに関わるボランティア活動への関心・着手意欲の偏相関を検討したものである<sup>3)</sup>。

共感性とボランティア活動への関心・着手意欲の有意な正の偏相関は、共同的養護規範意識高群においてのみ見られた。また、自信とボランティア活動への関心の有意な正の偏相関は、共同的養護規範意識低群においてのみ見られた。親準備性および受容性については、共同的養護規範意識高群、低群いずれにおいても、ボランティア活動への関心・着手意欲との有意な偏相関は見られなかった。

表4. 共同的養護規範意識が養護性と子どもに関わるボランティア活動への関心・着手意欲の関係に及ぼす影響

共同的養護規範意識高群	ボランティア活動への関心	ボランティア活動への着手意欲
共感性	.41**	.32**
技能	-.01	-.02
親準備性	.10	.11
受容性	-.05	.02
共同的養護規範意識低群		
共感性	.14	.08
技能	.33*	.21
親準備性	.18	.13
受容性	-.05	.02

※表中数値は偏相関係数, \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

#### 4. ボランティア経験が養護性、共同的養護規範意識と子どもに関わるボランティア活動への関心・着手意欲の関係に及ぼす影響

表5は、仮説2（養護性と子どもに関わるボランティア活動への関心・着手意欲の正の相関は、子どもに関わるボランティア活動の経験がない人よりある人において顕著に見られるであろう。）、および仮説3（共同的養護規範意識と子どもに関わるボランティア活動への関心・着手意欲の正の相関は、子どもに関わるボランティア活動の経験がない人よりある人において顕著に見られるであろう。）を検討するため、子どもに関わるボランティア活動の経験群（26人）と未経験群（111人）、それぞれについて、養護性の各要素および共同的養護規範意識と子どもに関わるボランティア活動への関心・着手意欲の偏相関を検討したものである<sup>4)</sup>。

まず、養護性の各要素とボランティア活動への関心・着手意欲の偏相関を見ていく。ボランティア経験群では共感性とボランティア活動への関心・着手意欲の間に中程度以上の有意な正の偏相関が見られた。一方、ボランティア未経験群では共感性とボランティア活動への関心の間に弱い正の偏相関が見られるに留まった。親準備性がボランティア活動への関心・着手意欲と有意、もしくは有意傾向の正の偏相関を持っていたのはボランティア未経験群のみである。一方、受容性とボランティア活動への関心の間に有意傾向の負の偏相関が見られたのは、ボランティア経験群においてのみである。

次に、共同的養護規範意識とボランティア活動への関心・着手意欲の偏相関を見ていく。ボランティア経験群では、共同的養護規範意識とボランティア活動へ

の関心・着手意欲の間に有意もしくは有意傾向の負の偏相関が見られた。一方、ボランティア未経験群では、共同的養護規範意識とボランティア活動への関心・着手意欲の間に有意な正の偏相関が見られた。

表 5. ボランティア経験が養護性、共同的養護規範意識と子どもに関わるボランティア活動への関心・着手意欲の関係に及ぼす影響

ボランティア経験群	ボランティア活動への関心	ボランティア活動への着手意欲
共感性	.56**	.48*
技能	.26	-.02
親準備性	-.03	-.06
受容性	-.39 <sup>†</sup>	-.16
共同的養護規範意識	-.53*	-.38 <sup>†</sup>
ボランティア未経験群		
共感性	.23*	.11
技能	.06	.03
親準備性	.21*	.18 <sup>†</sup>
受容性	.02	.08
共同的養護規範意識	.32**	.26**

※表中数値は偏相関係数，\*\* $p < .01$ ，\* $p < .05$ ，<sup>†</sup> $p < .10$

#### IV. 考察

##### 1. 共同的養護規範意識が養護性と子どもに関わるボランティア活動への関心・着手意欲の関係に及ぼす影響について

仮説 1（養護性と子どもに関わるボランティア活動への関心・着手意欲の正の相関は、共同的養護規範意識が低い人より高い人において顕著に見られるであろう。）について検討する。

共感性とボランティア活動への関心・着手意欲の有意な正の偏相関は、共同的養護規範意識高群においてのみ見られた。このことは仮説 1 を支持している。しかし、技能とボランティア活動への関心の有意な正の偏相関が、共同的養護規範意識低群においてのみ見られたこと、また、親準備性および受容性については、共同的養護規範意識高群、低群いずれにおいても、ボランティア活動への関心・着手意欲との有意な偏相関は見られなかったことは仮説 1 を支持しない。よって、仮説 1 は部分的に支持された。

共同的養護規範意識低群の場合、他者の子どもに対してまで養護的関りを持つ

べきという意識は持っていないため、子どもと関わる技能に自信がないと、子どもと関わる活動をなるべく避けようとする傾向が生じやすくなるものと考えられる。一方、共同的養護規範意識高群の場合、地域全体で子どもを育てるべきという意識を持っているため、子どもと関わる自信がなくても、ただちに子どもと関わる活動を避けようとする傾向に至りにくいものと考えられる。そのため、共同的養護規範意識低群においてのみ、技能とボランティア活動への関心の関連性が生じたのではない。

共感性についてのみ仮説1が支持された理由については、養護性の要素の中でも、特に他者の子どもと関わる内発的動機づけを促しやすいのが共感性であったためではないかと考えられる。

一方、親準備性については、自分の（将来の）子どもと関わることについての準備性なので、必ずしも他者の子どもと関わる動機づけとは関連しない可能性があるし、受容性については、これが高いことにより、子どもに対する拒否的態度は持たなくなるにしても、積極的に子どもに関わろうとする動機づけにまでつながるとは限らないものと考えられる。そのため、親準備性および受容性については、共同的養護規範意識高群、低群いずれにおいても、ボランティア活動への関心・意欲との関連性が生じなかったものと考えられる。

## 2. ボランティア経験が養護性、共同的養護規範意識と子どもに関わるボランティア活動への関心・着手意欲の関係に及ぼす影響

仮説2（養護性と子どもに関わるボランティア活動への関心・着手意欲の正の相関は、子どもと関わるボランティア活動の経験がない人よりある人において顕著に見られるであろう。）について検討する。

ボランティア経験群では共感性とボランティア活動への関心・着手意欲の間に中程度以上の有意な正の偏相関が見られたが、ボランティア未経験群では共感性とボランティア活動への関心の間に弱い正の偏相関が見られるに留まった。このことは仮説2を支持する傾向にある。一方、親準備性がボランティア活動への関心・着手意欲と有意、もしくは有意傾向の正の偏相関を持っていたのはボランティア未経験群のみであったこと、また、受容性とボランティア活動への関心の間に有意傾向の負の偏相関が見られたのは、ボランティア経験群においてのみであったことは仮説2を支持しない傾向である。よって仮説2は部分的に支持された。

親準備性がボランティア活動への関心・着手意欲と有意、もしくは有意傾向の正の偏相関を持っていたのがボランティア未経験群のみであった理由について

は、次のように考えられる。まず、子どもと関わるボランティア活動の経験者は、実際に子どもと関わる体験の中で、他者の子どもはあくまで他者の子どもであること（自分の子どもではないこと）を実感することになる。そのため、イメージの上で、他者の子どもと自分の（将来の）子どもが明確に区分され、その結果として、親準備性とボランティア活動への関心・意欲の関連性が現れにくくなった可能性がある。一方、子どもと関わるボランティア活動の未経験者は、他者の子どもと自分の（将来の）子どもを明確に区分する度合いが低いため、親準備性とボランティア活動への関心・着手意欲の関連性が現れやすくなったのではないかと考えられる。

また、受容性とボランティア活動への関心の間に有意傾向の負の偏相関が見られたのは、ボランティア経験群においてのみであった理由については、次のような解釈が可能である。まず、ボランティア活動等で子どもと関わる経験は、子どもへの理解の深化を促す中で、子どもとの関わり方の困難さも意識させることとなる（川瀬，2010）。そのため、ボランティア経験群では、子どもへの受容性と、子どもと関わることの難しさの理解が表裏一体の関係を持つこととなり、その結果として、子どもへの受容性が高い人ほどボランティアへの参加に慎重な態度を持つようになった可能性が考えられる。

次に、仮説3（共同的養護規範意識と子どもに関わるボランティア活動への関心・着手意欲の正の相関は、子どもと関わるボランティア活動の経験がない人よりある人において顕著に見られるであろう。）について検討する。ボランティア経験群では、共同的養護規範意識とボランティア活動への関心・着手意欲の間に有意もしくは有意傾向の負の偏相関が見られた。一方、ボランティア未経験群では、共同的養護規範意識とボランティア活動への関心・着手意欲の間に有意な正の偏相関が見られた。これらの結果は仮説3を支持しない。

共同的養護規範意識は、「社会全体で子どもを育てるべきだ」という意識であるが、そのような意識が強い人であるほど、「子どもを育てる活動に既に参加した経験がある人より、ない人こそが積極的に参加すべき」と考える傾向にあるかもしれない。このため、ボランティア経験群で、共同的養護規範意識とボランティア活動への関心・着手意欲の間に負の偏相関が見られたのではないかと考えられる。この解釈は、ボランティア未経験群で、共同的養護規範意識とボランティア活動への関心・着手意欲の間に有意な正の偏相関が見られたこととも整合性を持つものと考えられる。

### 3. 応用的示唆

大学生のボランティア活動への参加を促進する施策を考える上で、本研究で得られた知見から導かれる応用的示唆は次のとおりである。

第一に、共同的養護規範意識を高めるような啓発活動は、養護性の要素のうち、特に共感性が高い学生の、子どもと関わるボランティア活動への関心・着手意欲を高める上で効果を有する可能性がある。

第二に、大学の実習等で、学生に子どもと関わるボランティア活動を経験させることは、養護性の要素のうち、特に共感性が高い学生の、子どもと関わるボランティア活動への関心・着手意欲を高める上で効果を有する可能性がある。

### 4. まとめ

本研究では、大学生の養護性および共同的養護規範意識と、子どもと関わるボランティア活動への関心・着手意欲の関係を検討した。

大学生137人を対象とした質問紙調査が行われ、次のような知見が得られた。

第一に、養護性の要素のうち共感性と、ボランティア活動への関心・着手意欲の正の関係は、共同的養護規範意識が高い学生において顕著に見られた。

第二に、養護性の要素のうち技能と、ボランティア活動への関心の正の関係は、共同的養護規範意識が低い学生において顕著に見られた。

第三に、養護性の要素のうち共感性と、ボランティア活動への関心・着手意欲の正の関係は、子どもと関わるボランティア活動の経験がない学生より、ある学生において顕著に見られた。

第四に、共同的養護規範意識および、養護性の要素のうち親準備性と、ボランティア活動への関心・着手意欲の正の関係は、子どもと関わるボランティア活動の経験がある学生より、ない学生において顕著に見られた。

### 注

- 1) 総務省の社会生活基本調査(総務省統計局, 2017)によれば、まちづくりのための活動、健康や医療サービスに関係した活動等、11のボランティア活動のカテゴリのうち、15～19歳および20～24歳の参加率が最も高いと推定されたカテゴリは、子どもを対象とした活動であった。
- 2) 棚澤・福本・岩立(2009)の研究では、第四因子は子どもへの拒否的態度を内容とする項目に正の負荷量を示し、「子どもの非受容性」と命名されていた。
- 3) 独立変数(養護性の各要素)のある要因とボランティア活動への関心・着手意欲の偏

相関を検討するにあたっては、当該要因以外の全ての独立変数を統制変数とした。

- 4) 独立変数（養護性の各要素および、共同的養護規範意識）のある要因とボランティア活動への関心・着手意欲の偏相関を検討するにあたっては、当該要因以外の全ての独立変数を統制変数とした。

## 引用文献

- 安積陽子（2008）看護系・福祉系大学生の養護性の形成に関する一考察―性別と乳幼児接触体験との関連から― 甲南女子大学研究紀要創刊号 看護学・リハビリテーション学編 23-28.
- Fogel, A. & Melson, G.F. (1989) 子どもの養護性の発達（小嶋秀夫（編）乳幼児の社会的世界 170-186 マカルピン美鈴・訳）有斐閣
- Fogel, A., Melson, G.F. & Mistry, J. 1986 Conceptualizing the determinants of nurturance: A reassessment of sex differences In Fogel, A & Melson, G.F. (Eds.) Origins of nurturance; Developmental, biological, and cultural perspectives on caregiving (53-67) Hillsdale NJ, Lawrence Erlbaum Associates.
- Hyde, M.K. & Knowles, S.R. 2013 What predicts Australian university students' intentions to volunteer their time for community service? Australian Journal of Psychology, 65, 135-145.
- 伊多波美奈・首藤敏元（2017）大学生における障害児キャンプへのボランティア参加を促す要因 埼玉大学紀要（教育学部） 66(1), 117-128.
- 岩治まとか（2009）大学生における養護性の検討 東京家政大学研究紀要 49(1), 133-142.
- 川瀬隆千（2010）大学生の親準備性に関する研究 宮崎公立大学人文学部紀要 17(1), 29-40.
- 金丸智美（2019）「児童心理学」講義受講による大学生の養護性の変化 淑徳大学研究紀要（総合福祉学部・コミュニティ政策学部） 53, 53-70.
- 榎澤令子・福本俊・岩立志津夫（2009）大学生における過去の被養護・養護体験が現在の養護性（nurturance）へ及ぼす影響 教育心理学研究 57, 168-179.
- 小嶋秀夫（1991）養護性の概念化とその発達過程の推論 日本教育心理学会総会発表論文集 33, 205-206.
- 内外学生センター（1999）「学生のボランティア活動に関する調査」結果について 大学と学生 409, 56-61.
- Okun, M.A. & Sloane, E.S. 2002 Application of planned behavior theory to predicting volunteer enrollment by college students in a campus-based program. Social Behavior and Personality, 30(3), 243-250.
- 太田ひろみ（2014）都市部での子育てをめぐる課題と大学が行う子育て支援活動 杏林医学会雑誌 45(3), 101-104

- 総務省統計局 (2017) 平成 28 年社会生活基本調査結果 (<https://www.stat.go.jp/data/shakai/2016/kekka.html> 2019年12月23日閲覧)
- 礪波朋子 (2011) 女子大学生の乳幼児との接触経験と育児イメージ及び養護性との関連 京都光華女子大学研究紀要 49, 13-25.
- 礪波朋子 (2012) 青年期の子どもイメージ・育児イメージ及び養護性に関する研究 京都光華女子大学研究紀要 50, 41-52
- 富山尚子 (2013) 実習経験が養護性に及ぼす影響—保育・幼児教育系学部における縦断的研究 東京成徳大学子ども学部紀要 2, 21-33

## 資料. 養護性測定項目の因子構造

	第一因子	第二因子	第三因子	第四因子	共通性
幼児の姿をみかけるとつい目で追ってしまう	-.040	.811	.129	-.121	.635
テレビに小さい子どもが出てくると興味を持ってみる	.374	.535	-.079	-.084	.515
幼い子どもが泣いていると何とかしてあげたいと思う	.138	.533	.103	.124	.625
子どもが遊んでいるのを見てると楽しくなる	.107	.599	-.025	.231	.681
小さい子どもを見ると自分も笑顔になっている	-.032	.734	.122	.097	.739
幼い子どもの瞳にひきつけられるものを感じる	-.054	.977	-.061	-.160	.676
子どもの心の動きに興味がある	.081	.676	-.175	-.016	.388
子どもが不安そうな顔をしている時は、不安を取り除いてあげたい	.026	.681	.068	.017	.566
子どもが好きなほうだと思う	.387	.185	.144	.329	.792
大勢の子どもを相手にして遊ばせることができる	.907	.098	-.037	-.073	.818
幼い子どもの世話には自信がある	.897	-.074	.102	.005	.845
幼い子どもがぐずっている時、うまくなだめることができる	.857	-.057	-.017	.154	.831
幼い子どもをあきさせないで30分以上遊ばせることができる	.909	.111	-.032	-.086	.830
赤ん坊をあやすのがうまいと思う	.826	.034	-.087	.031	.665
今すぐにでも幼稚園の教師をやっていけそうな気がする	.849	.039	.042	-.288	.567
幼い子どもの話し相手になれると思う	.790	-.043	-.031	.153	.713
自分は子どもを育て、よい親になろうと思っている	-.161	-.023	.984	.014	.793
できれば自分も親になって子どもを育てようと思う	-.105	.047	.987	-.055	.854
自分は将来我が子に慕われる親になれるような気がする	.269	-.068	.779	-.057	.786
将来、子どもをうまく育てられると思う	.282	-.012	.737	-.132	.716
子育てにはいろいろ煩わしいことが多いのではないかと思う	.042	-.021	.147	-.236	.035
子どもがわがままなことをいっているのを見ると叩きたくなると思う	-.105	.238	.004	-.586	.276
幼児の遊び相手になる自信はない	-.439	.097	.047	-.561	.645
小さい子どもを見ても別にかわいいと感じない	.249	-.241	-.026	-.767	.660
幼い子どもはあまり好きになれない	.046	.010	-.068	-.898	.822
因子間相関	-				
	.63	-			
	.61	.61	-		
	.61	.63	.60	-	